

## ルカによる福音書2章 「御救いの訪れ」

### 1A 嬰兒イエス（約束） 1-20

1B 皇帝の勅令 1-7

2B 羊飼いへの啓示 8-20

1C 御使いによる知らせ 8-14

2C 飼葉桶の布に包まった方 15-20

### 2A 幼子イエス（信仰） 21-38

1B 律法の遵守 21-24

2B 贖いを待ち望む人々 25-40

1C 敬虔で、正しい人 25-35

2C 女預言者 36-38

### 3A 少年イエス（知恵） 39-52

1B 過越の祭り 39-45

2B 父の家 46-52

## 本文

ルカによる福音書2章を開いてください、私たちは、ルカによる福音書がバプテスマのヨハネの誕生とイエス様の誕生を交互に描いていることを学びました。初めに、ヨハネの誕生の告知を御使いガブリエルが行い、次に、イエスご自身の誕生の告知をガブリエルがマリアに対して行ないました。そしてヨハネが生まれたところを、私たちは前回学びました。次に、イエスご自身の誕生を見ていきます。

### 1A 嬰兒イエス（約束） 1-20

1B 皇帝の勅令 1-7

1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。2 これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。3 人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。

これが、イエス様がお生まれになる時の歴史的背景です。ぜひ、午前礼拝の説教を後で聞いてください、そこで皇帝アウグストゥスのことを話しています。さらに、2 節にはシリアの総督キリニウスのことを話しています。ルカが、この福音書を書いているテオフィロに対して、「1:4 すでにお受けになった教えが確かであることを、あなたによく分かっていたいただきたい」と言ったことを思い出してください、確かにこれは自分たちの歴史の中に神が介在してきたのだということをルカは、注意深く記しています。

時は、ローマがこれまで共和政であったところから帝政になった、つまりローマ帝国になった時のことです。初代皇帝がアウグストゥスです。帝国というのは単なる大きな国のことを指していません。数多くの国々を征服し、それらを自分の支配下に置いているということです。かつての大英帝国のようなものであり、ローマ帝国は北アフリカ、中東、そしてヨーロッパという、三つの大陸にまたがり、地中海世界を全て自分たちのものとしていました。イスラエルの地域は、ローマにとっては辺境の植民地のようなものであり、しかし住民登録によって全ての人々が自分の故郷の町に戻って行かなければならないという、否が応でもローマ帝国の支配を肌で感じなければいけなかったのです。住民登録は、自分たちは皇帝の所有になっている民であることを示しており、徴税の対象となります。

4 ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

ベツレヘムは、エルサレムから南に 10 キロぐらいのところにあります。「パンの家」という意味ですが、かつて大麦と小麦の収穫の場面が出て来るルツ記があります。そこでボアズとルツが結婚をして、そこからダビデが生まれました。彼は羊飼いであり末の子でありましたが、主が彼に油を注ぎ、そして後に王となります。そしてダビデに対して、彼の世継ぎの子が永遠の神の国を受け継ぐ約束を、神がお与えになり、それで油注がれた方、メシアはベツレヘムから出て来るという、ミカの預言につながります。

しかし、ダビデの家であるとか、またダビデ王朝という話は、何百年も前の大昔の話になってしまっています。バビロンによって紀元前六世紀にユダの民が捕え移されてからユダヤ人は異邦人の支配の中で生きてきました。王国は当の昔に滅亡しており、その末裔はヨセフのように貧しい暮らしを送っていました。

5 身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

ヨセフだけでなく、マリアも登録するためにベツレヘムに行きました。ここで大事な言葉は、「身重になっていた、いいなずけの妻」であります。まだ婚約状態の許嫁なのですが身重になっていたのです。前回お話したように、ナザレの町では噂が立っていた可能性が大です。ヨセフ自身は御使いによって、聖霊によって身ごもったのだと伝えられていたので、そのまま彼女を受け入れましたが、そういったことを知らない人々にとっては、「じゃあ、その子供は誰の子供だ？」ということになります。ベツレヘムに住民登録のために戻って来た者たちは、ダビデー族の人たちが多かったと思われれます。ですから、注解書によれば、ベツレヘムに来て肩身の狭い思いを二人はしていた

のではないか？という推測があります。「宿屋」とありますが、これは「客間」と訳すことのできる言葉です。その客間は遠い親戚の家だったのかもしれませんが。そこには彼らの泊まる部屋がないから、それで家畜のいる部屋のほうに行きなさいと言われて、そっちに行った可能性があります。しかし、よりによってマリアはそこで産気づきました。そして出産したのですが、家畜が餌を食べる飼葉桶に布にくるんで寝かせたのです。

今、わざと「寄りによって」という言葉を使いました。しかし、それはあくまでも人間的な見方です。ルカは注意深く、「アウグストゥスによる世界支配」と対比させて「ダビデの血筋」を取り上げているのです。なぜなら、イスラエルの支配者はベツレヘムから出なければいけないという預言を、ミカが何百年も前に行っていたからです。このような貧しく、同族の者たちからも怪しいと疑われ、飼葉桶にしか乳飲み子を置くことしかできなかった夫婦を高く引き上げておられます。まさに、マリアが賛歌を神に捧げた、その歌詞に出て来る内容です(1:51-55)。神はこのように歴史を動かしておられます。ご自分の国を、小さき者、貧しき者たちを通して拵げて行かれます。世界の支配者は、自分たちこそが世界を動かしていると思っていますが、いいえ、彼らは神の御国のご計画の中に組み込まれているのです。

## 2B 羊飼いへの啓示 8-20

### 1C 御使いによる知らせ 8-14

8 さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」

ヨハネが誕生する告知も、またイエスご自身が誕生する告知も天使長ガブリエルが行いましたが、再び天使が、イエス様の誕生を伝えにきました。主の栄光が彼らの周りを照らして、彼らが非常に恐れたとありますが、私たちはなかなか、主の栄光の力がどれだけのものか体験していないので、想像ができません。ヨブが、「26:14 私たちは神のささやきしか聞いていない。御力を示す雷を、だれが理解できるだろうか。」と言っていますが、雷によって神の栄光の力が現れているけれども、それも囁き程度であるということなのです。ですから、神の御座に仕えている御使いが、このようにやってくるだけでも、とてつもない畏怖を抱いたかと思えます。

主が、御使いを遣わすことをお決めになった対象が、羊飼いであったことは、当時の人々を驚かせたに違いありません。午前礼拝で説明しましたように、羊飼いは卑しく汚れた職業とみられていました。けれども、彼らはとても大切な働きをしています。ベツレヘムの羊は、過越の祭りのいけに

えに使われるものです。ベツレヘムでお生まれになった神の子羊は、過越の子羊としてエルサレムで犠牲となるということです。

ここで使われている言葉に注目してください、「私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」ここにある一つ一つの言葉は、ローマ皇帝に対して使われていたものだからです。大きな喜びとは、良き知らせ、福音のことです。私たちはいつも、福音という言葉を使っていますが、それは「皇帝が全世界に平和をもたらした救世主なのだ」という意味合いで使われていたからです。そして、世界を治める「主」であり、皇帝に栄光あれ！という賛辞が送られていたからです。御使いは、「いいえ、イスラエルの民にこそ栄光があります。ダビデの子が生まれたことこそが、良き知らせであり、この方が私たちの救い主であり、神に油注がれたメシアなのです。」と言っているのです。ザカリヤがヨハネの生まれた時に、賛美しましたね。「1:68 主はその御民を顧みて、贖いをなし、救いの角を私たちのために、しもべダビデの家に立てられた。」しかも、主の使いは「今日」と言って、この日から新しい御国の時代の幕開けなのだと言っているのです。

13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」

ローマには、とてつもなく整然と組織立てられた軍隊がいました。しかし、ヨセフとマリアには、天の軍勢がついていました。そして一斉に神を賛美したのです。午前礼拝で引用しましたが、無数の御使いがイエスを賛美している様子が、黙示 5 章にあります。そこには神に栄光があるようにと歌い、そして、地には平和があるようにと言っていますが、飽くまでも「みこころにかなう人々」であります。つまり、神の御心にかなうイエスご自身を主として生きる人々であります。ですから、ここは私たちに直接関わる賛美なのです。私たちこそが、神に栄光を帰し、イエスを主として生きる中で、どんなことがあっても平安にしていることができるのです。

#### 2C 飼葉桶の布に包まった方 15-20

15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。17 それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。

すばらしいことです、このようなすばらしい知らせを伝えなかったらどうするのか！という思いから、急いでベツレヘムに行き、熱心に捜し、見つけたら御使いに告げられたことを伝えました。これが、キリストの救いにあずかった者たちの姿です。イエス様のもたらした救い、罪の赦しと、自分を虐げている敵からの救いを、どうして心の中にしまっておくだけにできるでしょうか！

そして羊飼いたちにとって、布に包まれた飼葉桶で寝ている嬰兒を捜すのは、それほど難しいことではなかったことでしょう。一軒一軒、回って行きますが、飼葉桶を捜しているのですから、卑賤の男たちだとしても、すぐに近づけます。これが客間のようなところで生まれていたのであれば、追り返されたかもしれません。

18 聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

興味深いことに、三つの反応がここにあります。そこに居合わせていた聞いた人々は、ただ驚いています。これが、良き知らせ、福音を聞く中で多くの反応です。「イエスが、死者の中から復活した??なんだか、変なことを言うもんだね〜。」と反応します。しかし家族や親戚の中で、イエスを信じたという話を聞いたら、口を閉ざし、身構えて、考え込むでしょう。これが驚くということです。

けれども、もう一つがマリアの反応です。マリアとヨセフにとって、自分たちの生活で精一杯だったことでしょう。貧しい生活であることは、後でエルサレムにいて捧げたいけにえでも推し量ることができます。そして今も飼葉桶に嬰兒を寝かせなければいけません。ところが、主の使いが現れて、無数の御使いが神を賛美していたということ、これらを聞いて、驚いてはいますが、それはいったいどういうことなのか、思い巡らしているのです。初めにガブリエルが受胎告知をした時も、マリアは不信に陥らず、「1:34 どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。」と答えています。彼女は、主から与えられたことが自分の今の理解をはるかに超えていても、それでも、いったいこれはどういうことでしょうか?と問い巡らす力を持っていたのです。

現在、自分の理解を超えるようなことが起こると、感情に支配されて、感情に任せて動く人々が多くなっています。しかし、キリスト者はマリアのように、たとえ今は分からなくても、いったいどういうことなのか?と問い巡らす恵みが与えられています。なぜなら、私たちは神を信じているからです。すべてを初めから終わりまで知っておられる神を信じているからです。

そして三つ目の反応が、羊飼いたちです。神をあがめ、賛美しています。彼らは、再びいつもの羊飼いの仕事に戻ったことでしょう。夜番も変わりなく行ったでしょうし、他の人々に話したところで信じてもらえないでしょう。しかし、主ご自身にお会いすることができたという喜びが心を支えていたことでしょう。私たちも同じです、召されているところに留まれば、そこはいつもと変りない仕事を続けなければいけないかもしれません。けれども、主が確実に私たちのところに来てくださったのだと知れば、その喜びが自分を支えることになるのです。

## 2A 幼子イエス（信仰） 21-38

### 1B 律法の遵守 21-24

21 八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子の名はイエスとつけられた。胎内に宿る前に御使いがつけた名である。

ヨハネの両親ザカリヤとエリサベツもそうでしたが、ユダヤ人として主の律法を守り行なっていました。アブラハムに対して神が命令された、乳飲み子の八日目の割礼です。モーセの律法によっても命じられています。これを行った後に、当時のユダヤ人の習慣であった、名を付ける作業をしました。ここでは、天使長ガブリエルがマリアに告げた名前を与えています。「イエス」です。「主は救い」という意味です。救いというのは、ザカリヤが1章で賛美した時に、罪の赦しについて語っていました。また、敵からの救いを語っていました。

私たちの不条理な世界は、一つに人の罪によってもたらされています。ですから、イエス様が中風の人をご覧になった時に、それを直されるのではなく、まず罪の赦しを宣言されました。他の煩悩、環境のせいにするのではなく、まず自分自身がどうなのか？ということです。そして敵からの救いです、これはエバを惑わし、アダムが罪を犯し、神から引き離れた蛇に働くサタン、その頭を打ち砕くということです。私たちが罪から解放され、サタンの仕業をかえって踏みつける、そうした救いを受け取っています。

22 そして、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子をエルサレムに連れて行った。23 それは、主の律法に「最初に胎を開く男子はみな、主のために聖別された者と呼ばれる」と書いてあるとおり、幼子を主に献げるためであった。24 また、主の律法に「山鳩一つがい、あるいは家鳩のひな二羽」と言われていることにしたがって、いけにえを献げるためであった。

清めの期間をベツレヘムで過ごして、そのままエルサレムに向いました。ここの箇所、ヨセフとマリアについての二つのことを知ることができます。一つは、「ユダヤ人として律法を守る生活をしていた」ということです。「彼らのきよめの期間」とあります。レビ記12章にありまして、女が子を産んでから七日間、不浄の期間を過ごします。そして八日目に割礼を施して、さらに血の清めのために三十三日間、こもります。聖所に行くことはできない、とあります。ですから、出産してから合計、40日間です。これは、聖書では「女から生まれて来る者」という言い回しがあるように、生身の人であることを強調していることです。人は、アダムによって罪を宿して生まれてきており、出産による血や他の体液である悪露が、その罪の性質を象徴的に示しています。

そしてもう一つは、「最初に生まれて来る男子は、つまり初子は、主のものであるから、聖別する」ということです。出エジプト記13章2節にあります。これは神にとってイスラエルは初子であるから、神を覚えるために、自分の初子、あるいは長子は神のものということです。神が自分の独り子

を私たちに与えになったことを暗に示しています。この方が私たちの長子になってくださっています。イエス様は長子でありますから、エルサレムの神殿でこの子を献げる儀式を行ったのです。さらに、清めの期間が終わった時に女は、いけにえを捧げるようにレビ記 12 章に定められていますが、子羊を捧げなければいけないと書かれています。しかし、「彼女に羊を買う余裕がなければ」、ここにあるように「二羽の山鳩か、二羽の家鳩のひなを」取るとあるのです(12:8)。ここから、彼らが貧しい家庭であることが分かります。

なぜ主は貧しい家庭にお生まれになったのか？パウロがコリント第二の手紙で答えています。「8:9 あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」イエス様は神と一つ、つまり全世界はご自身のものであり、富んでおられます。ところが、このような貧しい家庭にお生まれになりました。それは、だれもがキリストに近づくことができるようにして、それで霊的な富を持つことができるようにするためです。神の子供になり、神の国を受け継ぐ者とされたのです。いかがでしょうか、王であれば本人に近づくことは、ほんとうに難しいです。自分の心の貧しさなど、知っておらうことはできません。けれども、イエス様が自ら無になられました。それによって、全ての人を神に引き寄せるようにできます。

もう一つ、なぜ律法を守るユダヤ人の家に生まれたのか？「ガラ 4:4-5 しかし時が満ちて、神はご自分の御子を、女から生まれた者、律法の下にある者として遣わされました。それは、律法の下にある者を贖い出すためであり、私たちが子としての身分を受けるためでした。」イエス様は罪なき方なのに、不浄の期間を過ごした女から生まれた者として来られ、それだけでなく、律法の下にいる者として来られたのですが、それは律法の下にいる者たちを贖い出すことができるからです。もし、律法の下にいなかったら、イエスは部外者となり、ユダヤ人は彼を自分の救い主とは受け入れられません。同胞であるからこそ、イエス様はイスラエルのメシアになることができます。これは、私たちに大きな知恵を与えます。私たちは、それぞれの場に遣わされています。日本人でもあります。それは決して無意味なことではなく、むしろ同じような環境に置かれている人々のところに近づき、すべてのすべてになられたキリストを紹介することができるのです。

## 2B 贖いを待ち望む人々 25-40

### 1C 敬虔で、正しい人 25-35

25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた。また、聖霊が彼の上におられた。26 そして、主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない、聖霊によって告げられていた。27 シメオンが御霊に導かれて宮に入ると、律法の慣習を守るために、両親が幼子イエスを連れて入って来た。

エルサレムの神殿の境内に二人が着くと、そこで二人の老人が待っていました。一人がシメオン

で、もう一人がアンナです。初めにシメオンですが、「正しい、敬虔な人」とあります。私たちは、エルサレムとその神殿について、そこで腐敗が起こっていたことを、イエス様の宮清めの話の中で見ます。宗教指導者は、正しくメシアに対して応答しませんでした。けれども、イザヤ書など、預言者たちは、「残された者たち」を記しています。宗教として墮落してしまっても、そこには神を敬う残された者たちがいる、ということです。イスラエルが切り倒されるという裁きの預言を神がイザヤに与えられますが、「6:13しかし、切り倒されたテレビンや榿の木のように、それらの間に切り株が残る。この切り株こそ、聖なる裔。」切り株のように、残された聖なる者たちがいるということです。

その一人がシメオンです。「イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた。」とあります。これは、イザヤの預言、40章のところに、このような慰めの言葉があるからです。「40:1-2「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを【主】の手から受けている、と。」そして、ここでも聖霊の働きをルカは強調しています、彼は死ぬ前に必ず主のキリストを拝見することができる、と。そうした示しが与えられて、それで忍耐して待っていたからこそ、御霊の導きがあって、それで幼子イエスを見ることができたのです。

28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。29「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。30 私の目があなたの御救いを見たからです。31 あなたが万民の前に備えられた救いを。32 異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を。」33 父と母は、幼子について語られる様々なことに驚いた。

マリアが賛歌を神にささげ、ザカリヤも捧げました。その他、天の軍勢も神を賛美していましたね、そしてシメオンがここで賛美を捧げています。シメオンは、この幼子自体を、「あなたの御救いを見た」といって、ほめたたえています。救いというのは、何か一定の教えや原則ではありません。イエスご自身が私たちにとっての救いです。この方に人格的に触れる時に、その人は救われます。

そして、ここでシメオンが驚くべき預言を行いました。イスラエルの栄光となるというのはそうなのですが、万民の救い、異邦人を照らす啓示の光と、異邦人にも及ぶ救いをもたらすことを言及しているからです。これはとても、御心にかなっています。預言者イザヤは、イスラエルの慰めを語る時に、キリストについて、「42:6 あなたを民の契約とし、国々の光とする。」と言って、異邦人にも及ぶ救いを繰り返し語っているからです。しかし、これはユダヤ人にとっては及びもつかない壮大な神のご計画であり、ゆえに両親は驚いています。自分の幼子について、なぜこのような大きなことを言われるのか？と思いました。

34 シメオンは両親を祝福し、母マリアに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れたり立ち上がったたりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められてい



ます。35 あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。」

シメオンは祝福してから、マリア個人に預言を行っています。それはとても厳しいものでした。イスラエルの民にとっての救いではあるが、全ての人々が彼を受け入れるわけではないということです。立ち上がる人もいるのですが、むしろつまずいて、倒れる人もいます。そして、人々の反対を受けます。これはユダヤ人の指導者らによって十字架に付けられることの預言です。そして十字架刑に処せられている時に、近くにマリアがいたことを、ヨハネは福音書の中で書き記しています。ですから、彼女の心にも剣が刺し貫かれるのです。

そして理由として、「多くの人の心のうちの思いが、あらわになるため」とあります。普段は平穩に生きて、善良な人のように見えても、イエス様の真理に触れると、その心の深いところにある思いが露わにされるのです。私たちはキリストの使者として、普段なら表れないような人々の心の思いを露わにされるところを見ることが多くなります。

#### 2C 女預言者 36-38

36 また、アシェル族のペヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。この人は非常に年をとっていた。処女の時代の後、七年間夫とともに暮らしたが、37 やもめとなり、八十四歳になっていた。彼女は宮を離れず、断食と祈りをもって、夜も昼も神に仕えていた。38 ちょうどそのとき彼女も近寄って来て、神に感謝をささげ、エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人に、この幼子のことを語った。

シメオンの次はアンナです。ルカは、この福音書をとても興味深く書いています。女の活躍を多く書いていることです。初めに、ヨハネの父ザカリヤと、イエスの母マリアを一組にしているかのように出しました。次にここです、シメオンだけでなくアンナも出しています。主が、ユダヤ人だけでなく異邦人にも救いを、そして男だけでなく女も等しく、ご自分の子として選ばれていることを、ルカを通して知ることが出来ています。

彼女は、アシェル族です。十二部族のうちの北イスラエルのほうに属していました。しばしば、失われた十部族という話をする人がいますが、失われていません。アシェル族の人が宮で仕えていたのです。そして、彼女は寡で、宮を離れないで、こんなにも祈りと断食によって主に仕えていました。こんな預言者が、シメオンと同じようにしてこの幼子の証しをしたのです。「エルサレムの贖い」とありますが、同じくイザヤ書にエルサレムの贖いが預言されています。「52:9 エルサレムの廢墟よ、ともに大声をあげて喜び歌え。【主】がその民を慰め、エルサレムを贖われたからだ。」当時のユダヤ人は、主流は軍事的な救いでした。ローマという物理的な力から救われることを信じていましたが、しかし、残された者たちは真実に贖いを待ち望んでいました。

この年長いた男女から、私たちは何を知ることができるのでしょうか？「待ち望む」ことの大切さです。神を信じて、忍耐して待つことの大切さです。シメオンもアンナも、あきらめることなく信じて、神に仕えていました。私たちも死ぬ時まで、神を信じてあきらめずに、忍耐していきたいです。

### **3A 少年イエス（知恵） 39-52**

#### **1B 過越の祭り 39-45**

39 両親は、主の律法にしたがってすべてのことを成し遂げたので、ガリラヤの自分たちの町ナゼレに帰って行った。40 幼子は成長し、知恵に満ちてたくましくなり、神の恵みがある上にあつた。

次に、幼子が成長した時のことをルカは記します。ルカのみが少年イエスの姿を描いていますが、この方がまず、「知恵に満ちてたくましくなり、神の恵みがある上にあつた」とある所に注目してください。知恵が満ちて、というのは、成長したら当然ながら物心がつき、いろいろなことが分かって来ます。けれども、ここでの知恵というのは、イエス様の場合、神の知恵に満ちていったと言ってよいでしょう。主が公生涯で、実に知恵に満ちた言葉を語られました。それは 30 歳の成人になってから語り始めたのではなく、その前から徐々に語り始めていかれたということです。

もう一つは、「神の恵みがある上にあつた」であります。恵みとは、神から好意が与えられているということです。私たちを成長させるのが、何か？神に何か自分の良いことを行って認められるのではなく、実にそれが、私たちが成長する時に陥ってしまう過ちですが、そうではなく、神に愛されているという保障、安心感があって、それで主から命じられていくことを行っていくことです。多く、霊的に成長できず、いつも同じ問題に陥ってしまっている人を見ると、はっきりしているのは恵みを知らないということです。「3:18 私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。」とペテロは第二の手紙で話しました。

41 さて、イエスの両親は、過越の祭りに毎年エルサレムに行っていた。42 イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習にしたがって都へ上った。

ユダヤ人の慣習にしたがって生きている両親の姿を見ます。ユダヤ人は、成年男子は、過越の祭り、五旬節、仮庵の祭りの、例年の祭りを、エルサレムに上って祝わないといけないと命じられています(申 16:16)。そしてイエス様が十二歳になられた頃のことです。十二は、イスラエル十二部族の数字ですし、また十二使徒の数字でもあり、神の統治を示す数字です。それから、ユダヤ人男子は十三歳になると、「バル・ミツパ」と言う成人式を行います。その直前での出来事です。大人として育つ前に、イエス様がいかに知恵に満ちていたかを次に教えられます。

43 そして祭りの期間を過ぎてから帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっておられた。両親はそれに気づかずに、44 イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道のりを進ん

だ。後になって親族や知人の中を捜し回ったが、45 見つからなかったので、イエスを捜しながらエルサレムまで引き返した。

ここは、映像となって頭に思い浮かんできそうです。エルサレムから、エリコに向かう道を下ります。ここは、良きサマリア人の喩えにあるように、盗賊や強盗がよく来るところなので、ここにあるように隊を組んで、複数で動きます。十二歳にもなっているので、他の人たちといっしょに来ていると思ひ、一日の道を歩んだのでしょう。ところが、イエス様がいません。引き返して一日かかりました。

## 2B 父の家 46-52

46 そして三日後になって、イエスが宮で教師たちの真ん中に座って、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。47 聞いていた人たちはみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。

「三日後」というのが興味深いです。聖書では、三の数字も多くありますが、やはりイエス様が三日目に甦られたことを思い出します。この時のイエスが神の御子であることが公に示された時となりましたが、それまでのイエス様はそこまでの方である認識が薄かったのです。似たように、これまでは十二歳の息子であったのが、実は自分たちの息子というよりも、父なる神の息子であるのでは？と思わされる出来事となるのです。

まず、ここで教師たちと話しておられます。しかも、真ん中に座っていますからイエス様が教師のようになっています。そしてユダヤ教の教師は知識を教えるのではなく、質問を受けたら、逆に質問をします。例えば、カエサルに納税するのは律法にかなっているかどうか尋ねた時に、イエス様は、銀貨を持って、「これはだれの肖像と銘ですか。」と尋ねておられます(マタ 22:20)。イエス様が、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさいと言われて、人々は驚嘆していましたが、ここでもそうです、少年イエスの知恵と答えに驚いています。

48 両親は彼を見て驚き、母は言った。「どうしてこんなことをしたのですか。見なさい。お父さんも私も、心配してあなたを捜していたのです。」49 すると、イエスは両親に言われた。「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」

人間的に聞いたら、とんでもないことをイエス様は言われています。父を前にして、自分はいつも自分の父の家にいると言ってしまっています。まるでヨセフが父であることを否定しているかのようです。けれども、もちろんこれは、神の家にイエス様がおられて、ご自身が神の御子であることを明かしているところです。

イエス様は、ここで知恵の源泉を明かしておられます。父なる神と共にいるということです。ここ

は、その神殿の敷地にいるという意味だけでなく、ご自身はいつも御父と交わっていることを示しています。ダビデも歌いました、「詩 27:4 一つのことを私は【主】に願った。それを私は求めている。私のいのちの日の限り【主】の家に住むことを。【主】の麗しさに目を注ぎその宮で思いを巡らすために。」主との交わりの中で、知恵が与えられ、しかも父としての神からの知恵です。箴言の中で、父の命令に聞き従いなさい、知恵を得るために、という格言が多くありますが、神から聞いていくというところに、知恵が与えられ、そして、人々に恵みを分かち合っていくことができます。

50 しかし両親には、イエスの語られたことばが理解できなかった。51 それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。

再びマリアは、全く理解できなかったこの言葉を心に留めています。本当は神の御子であり、両親に仕える必要はありません。けれども、女から生まれた方として子供としての成長も経験し、両親から仕えることも学びました。

52 イエスは神と人とのいつくしまれ、知恵が増し加わり、背たけも伸びていった。

かつて、主に用いられた預言者サムエルも、同じように呼ばれていました。「Ⅰサム 2:26 一方、少年サムエルは、【主】にも人にもいつくしまれ、ますます成長した。」正しい人よりも、愛されている人、という言葉がよくあります。イエス様はそのような方でした。人に愛されていました、けれどもそれは、神に愛されているところから出て来るものでした。そしてさらに、知恵が増し加わり、肉体的にも成長しました。12歳の時に、神が自分の父であることを明かされましたが、両親には仕えられていました。こうやって、イエス様は人と一つになることによって、私たちを贖いの中に引き入れることができるのです。

これから成人したイエス様の話が始まります。この時に、私たちもイエスに倣うことのできる生涯であることに気づくでしょう。イエス様につながっていることにより、私たちの内にキリストが形造られて、この方に付いて行くことができるようになります。